●モノグラフ

小学生ナウ

Vol. 7－1

おとなとの距離

―子どもと酒・タバコ・車の運転―

目次

要　約 …… 2

はじめに …… 6

1　子どもとアルコール …… 9

- 子どものアルコール環境 …… 9
- 酔っぱらいのイメージ …… 11
- おとなになったら自分は …… 13
- 子どもが飲んでいいか …… 14

2　子どもとタバコ …… 18

- 子どもの喫煙環境 …… 18
- タバコ飲みのイメージ …… 20
- 子どもの喫煙体験 …… 23
- なぜ子どもが吸っては悪いのか …… 26
- おとなになったらどうするか …… 29

3　車とバイク …… 31

- 車とバイクの所有率 …… 31
- 免許への関心 …… 33

まとめに代えて …… 35

子ども研究ノート①
テレビとのつき合い …… 深谷昌志 …… 37

資料1　調査票見本 …… 41

資料2　学年・性別集計表 …… 48

調査レポート／おとなとの距離

—子どもと酒・タバコ・車の運転—

要　約

①調査の意図

小学校で喫煙防止の教育を行うために、文部省が日本学校保健会に委託して「手引き」を作成、公表したことが、この調査のきっかけになった。子どもが喫煙やアルコール飲用を試みるのは、一方にはおとなになることへのあこがれがあり、他方にはその他のさまざまな要因がひそんでいると考えられる。そうした諸要因を解明せずには、効果的な喫煙（飲酒）防止教育はできないと思われる(資料Ａ、資料Ｂ)。

②子どものアルコール環境

子どもは、アルコールと身近な場所にいる。酒を「毎日・週に何日か・またはたまに飲む」父親は９割近く、母親は６割近くに達している(図１)。

③酔っぱらいのイメージ

とても「みっともない」「バカみたい」「気持ちが悪い」とする者は、５割～７割近くもいる(図３、図４、図５)。

東京学芸大学助教授　深谷和子

④おとなになったら

おとなになっても「ぜったい酒を飲まない」と言っている子は男子で15%、女子で20%しかいない（図6）。

⑤子どもが飲むことについて

お祝いの会に出たワイン(ぶどう酒)を小学生は飲んでいいか、とたずねたところ、「ぜったいいけない」とする者は男子で30%、女子で36%でしかなく、しかもその割合は、学年が上がるにつれて大きく低下していく(図7、図8、表1、表2)。

⑥子どものタバコ環境

父親の59%、母親の17%が、現在タバコを吸っている（図12)。父親にタバコをやめてほしいと言っている子は80%、量をへらしてほしいと言っている子は16%にも達する(図14、図15)。

調査レポート／おとなとの距離

——子どもと酒・タバコ・車の運転——

要　約

⑦タバコ飲みのイメージ

「みっともない」「バカみたい」「気持ちが悪い」とする子は2割弱。酔っぱらいに比べると、あまり悪いイメージは持たれていない(図17、図18)。しかし父親がタバコを吸わない（または禁煙した）子のほうが、タバコ飲みに悪いイメージを持っている（表3、図19)。

⑧子どもの喫煙体験

一度かそれ以上ある子は、6年男子で33%、6年女子で18%。その中でも、一度限りではなく、「数回ある」と答えている者（男子12%、女子4%）が、要注意だろう(図20、表4)。またこうしたいたずら経験は、父親がタバコを吸うグループに多く(表5)、また何度も喫煙体験を持つ子は、「勉強がとても苦手で、きまりをぜんぜん守らない、がんばらない」層に多くなっている（表6)。

調査概要

1.調査主題　おとなとの距離（喫煙防止のために）

2.調査視点　子どもたちに禁じられている「酒・タバコ・車の運転」に対しての子どもたちの意識を探る。

3.調査項目　車の運転について／酒について／タバコについて／あなたはどんな子ですか／あなたの将来について

⑨おとなになったら

おとなになってもタバコをぜったい吸わないと言っている子は、男子の41%、女子の69%である（図24）。

⑩車とバイクの免許を

将来とれる年齢になったら、車の免許をすぐとりたい、と言っている子は、6年男子で58%、女子で43%。バイクは36%と23%（表11）。

⑪まとめに代えて

十分な規範感覚を身につけさせる教育を

「きまりを守らない子」と自己評価する子どもたちには、酒、タバコ、運転免許のすべてにおいて、さまざまな意味で「危険な」態度が見いだされる。「おとなになりたい」気持ちを尊重しつつも、子どもにしっかりした規範感覚を身につけさせるにはどうしたらよいかが、今後の課題だろう。

4.調査時期　昭和61年10月
5.調査対象　東京、千葉の小学4・5・6年生
6.調査方法　学校通しによる質問紙調査

7．サンプル数　（人）

学年／性	男　子	女　子	計
4　年	197	222	419
5　年	216	207	423
6　年	269	225	494
計	682	654	1,336

はじめに

禁じられた遊びをめぐって

この号のタイトルは「おとなとの距離」というやや抽象的なものになっているが、サブタイトルをつけたように、内容は子どもたちが禁じられている「酒・タバコ・車の運転」に対しての「態度」を洗い出してみようとしたものである。

このテーマをとり上げた直接の動機は、昨年の6月15日付の朝日新聞の記事であった。同紙は、文部省が日本学校保健会に委託して「小学校　喫煙防止に関する保健指導の手引（B5判54ページ）」を公表したこと。これは嫌煙権運動を進める民間団体の要請や国会論議を受ける形で作られたもので、中学・高校編も予定していること。成人の喫煙者はへる傾向にあるのに、青少年の喫煙は広がりを見せ、喫煙で補導された未成年者は、7年前の約2倍（60年度）の約60万人にも達していることを報じている。

資料AとBにも掲げたように、とくに健康面への悪影響を中心に、禁煙教育を早期から行うことの意味は、だれしもが否定しないだろう。しかし子どもの周囲には、タバコを吸っているおとながたくさんいる。父親や母親、ひょっとすると担任教師も喫煙者かもしれない。おとな――それも子どもの敬愛するおとながそれをしていて、なぜ子どもにはそれが許されないのか。子どもはだれもが、一度はこうした疑問を持ったのではなかろうか。このことは、大きく言えば、おとなとは何か、子どもとは何かを問いかける大命題にもつながっている。

現に中学や高校では、どこの学校でも生徒たちの喫煙防止に手を焼いていると言われる。

トイレの窓から煙が出ているくらいは日常的なことであり、教師の目の前で吸われればこれを禁止せざるを得ないから、せめて自分たちの目にふれない場所で吸うようにと言いわたす教師もあるほどだと、私のゼミの学生たちは数年前の自分の中学・高校時代を回顧して語るのである。しかしなぜそんなにも、タバコが吸いたいのか。それは中学生や高校生の、おとなへのあこがれや逆におとなへの反抗など、思春期の複雑なメカニズムをふまえずには、理解しえないだろう。

問題はタバコだけではない。この種のものには他に、アルコールと車の免許がある。タバコと同じように、これにおとなが関わる場合は問題ではないが、子どもが関われば「不良行為」「非行行為」となる。そのことを子どもたちは、どう考えているのだろう。それを把握した後でなければ、禁煙教育にせよ禁酒教育にしろ、禁バイク運動にせよ、十分な効果は期待できないのではないか。

この号の「おとなとの距離」というテーマはそうした動機から設定された。主なねらいは子どもとタバコとの関係だが、酒、車についての項目も多少含まれている。しかしこのテーマを掘り下げるに適した対象は、小学生ではなくて、中学生かもしれない。彼らのおとなへの心理的距離をからませて、いつか中学生対象の調査も試みたいと考えている。

＜資料Ａ＞小学校 喫煙防止に関する保健指導の手引（Ｓ．61．３）

日本学校保健会 p.2 ～p.3 より引用

小学校における喫煙防止に関する保健指導の必要性

ＷＨＯ（世界保健機構）は、昭和53年（1978年）の総会で、喫煙による健康上の問題を取り上げ、また昭和50年（1975年）に各国政府及び保健機関が実施すべき勧告の中で、喫煙者への対策と非喫煙者を守る対策にふれ、活動の目的に若い人たちがたばこを覚えないようにすることをあげ、教育活動として次のような要項（抄）を述べ早期から喫煙防止に関する教育を開始するよう呼びかけている。

- 喫煙に対する保健教育は、全般的な保健教育の一部とみなす。よい健康の価値を強調し、健康を個人で制御できる行為、健康を左右する行為として取り扱う。
- 保健教育の重要な一部として、喫煙の健康に及ぼす害についてカリキュラムを作成する。
- 児童に対する保健教育は、早い時期に家庭と学校とで始める。全教育課程を通じ、さまざまな段階で強化する。
- 非喫煙者の権利、特に小児と妊婦の権利を強調し、吸おうと思わないのにたばこの煙を吸い込むことから守る。

喫煙の理由を調べてみると、好奇心からたばこに手を出し、やがて習慣となって禁煙できなくなるということが多くの例で認められている。このことを考えると、喫煙を始めさせない指導が極めて重要である。そのためには、喫煙開始年齢以前に喫煙防止のための教育を始めなければならない。開始の時期としては、将来を見通し、自分の健康について考えることができるようになる小学校の時期こそ、最も適した時期と思われる。　（中略）

喫煙により、健康が損われることは言うまでもないが、近年では他人の吸うたばこの煙を間接的に吸う際の影響も（受動喫煙）明らかにされ始めている。この問題も決して無視はできないが、わが国においては、喫煙行為それ自体は、普通、嗜好の問題としてとらえられている。

これは、たばこを吸う者と吸わない者それぞれの権利を守って吸う場所を分ける、という意味の「分煙」という言葉が最近用いられていることからも、理解することができる。指導に当たっては、健康を中心に置くことに留意し、社会的な悪とは分けて考えることが望ましいと考える。

つまり、児童にとっては、たばこを吸っている人は悪い人ということになりがちであるので、保護者等の喫煙行為そのものを悪として非難することのないよう、十分に配慮して、喫煙防止のための教育を実践していくことが大切である。

（傍線は筆者）

＜資料Ｂ＞学校指導における喫煙防止に関する指導計画の具体例

学年	主題名	指導のねらい
1年	げんきな子	(1) 健康を害するもの（飲酒や喫煙にも軽くふれる）を理解させ、自分の健康を守る意欲を育てる。 (2) 自分の身の回りの決まりや生活習慣を見直させ、健康な生活を送る態度を育てる。
2年	きれいな空気	(1) どんなときに空気が汚れるかを考えさせ、汚れに対する関心を高める。 (2) 空気が汚れると体によくないことを理解させ、進んで換気をする態度を養う。
3年	たばこの煙とわたしたち	(1) たばこの煙が、体にどんな害を与えるかを理解させる。 (2) たばこの煙を吸わないようにするための方法を考えさせ、実践する態度を養う。
	たばこの煙に含まれているもの（急性影響を中心として）	(1) たばこの煙を間接的に吸った経験や簡単な実験を通して、たばこの煙の中には有害なものが含まれていることを気付かせる。 (2) たばこの煙の恐ろしさを知らせ、たばこを吸わない態度を育てる。
4年	健康に悪いたばこ	(1) たばこの煙は、本人にも回りの人にも害を与えることを理解させる。 (2) 健康を守るために、自分でできる範囲で努力しようとする態度を育てる。
	たばこの毒（急性影響を中心として）	(1) たばこを水にとかした中でイトミミズが死ぬところを見せて、たばこの毒性を理解させる。 (2) たばこの毒を知らせ、たばこを吸わない態度を育てる。
5年	たばこと病気	(1) 喫煙による体に対する害やがんの発生について理解させる。 (2) たばこを吸わない心構えを持たせるとともに、身近な人の健康を考えてあまり吸わないように勧めることができるようにする。
	たばこと心臓（急性影響を中心として）	(1) たばこを吸うと心臓の脈動が変化するように、すぐ体に影響が出ることをとらえさせ、たばこの恐ろしさを理解させる。 (2) たばこの害を知らせ、たばこを吸わない決意をさせる。
6年	学習や運動に悪いたばこ	(1) たばこを吸うことによって、頭の働きや運動能力が低下することを理解させる。 (2) たばこを吸わない決意をさせ、小さいうちからの喫煙は害が大きいので、注意し合うことができるようにする。
	たばこと寿命	(1) たばこを吸っている者は、たばこを吸っていない者に比べて、短命であることを理解させる。 (2) たばこを吸うことは寿命を短くしていることを理解させ、将来にわたってたばこを吸わない決意をもたせる。

（同書p.14～p.15より引用　ただし、テーマ設定の理由は除いてある）

1.子どもとアルコール

子どものアルコール環境

中学や高校の修学旅行で教師たちがチェックする行動の一つは、宿舎でのアルコールの飲用であるという。もしそうした行為があって新聞にでもとり上げられれば、学校の面目は丸つぶれだし、といって自販機がやたらに街角に置いてあるわが国では、生徒たちがそれを購入するのをチェックすることはむずかしい。事実、多くの修学旅行では、先生の目にはふれなかったが一部の生徒たちが缶ビールを飲んだ、などという話のあるほうがあたりまえ、なのだそうである。

しかも、「子どもはなぜアルコールを飲んでは悪いのか」と正面切って問われたら、それにきちんと答えられるおとなはどれだけいるだろう。現にフランスでは子どももワインを飲むと聞くし、日本だって大学1、2年生のコンパに、未成年だからアルコールを出さなかった、などという話は聞いたことがない。未成年者はアルコールを飲んではいけないという建前は、日本に限っても現実的にはかなり崩れつつあるように思われる。何といってもたいていのおとなはアルコールを飲むわけだし、子どもは家庭でその姿に接している。このレポートは、まずそうした子どもの環境上の問題に接近してみることからはじめよう。

図1は、子どもの両親がどのくらいアルコールを飲用するかを示したものである。父親で全くアルコールを口にしない者は12%、母親42%だから、子どもの環境は多分にアルコールと親和性を持ったものであることがわかる。しかも、昔と比べておそらく変わってきている部分は、母親のアルコール飲用だろう。毎日飲む母親が3%。父親の28%に比べればむろん大幅に少ないが、でも3%という数字

は伝統的な母親に育てられた筆者の世代には、ちょっとしたショックである。クラスに1人は、毎晩酒を飲む母親がいる勘定だし、週に何日か飲む母親を加えれば1割。クラスで4人の母親が、アルコールを常用していることになる。父親のほうは毎日が28%、週に何日かが23%。合わせると5割。こちらのほうは、昔と比べるとむしろ少なくなってきているような印象すら受ける。

さて図2は、家族が夕食に酒を飲む光景を子どもがどうとらえているか、たずねたものである。男子と女子では多少女子に拒否反応が強いものの小差であり、全体としては「とてもいや」9%、「少しいや」21%。合わせると3割の子が飲酒をいやと言っている。この数字が高いか低いかはわからないが、とに

図1　両親と酒

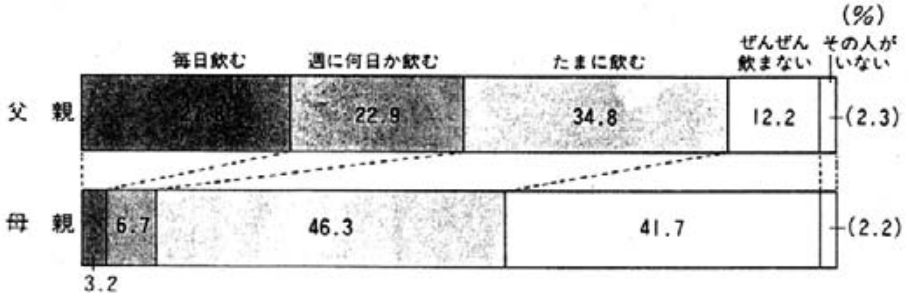
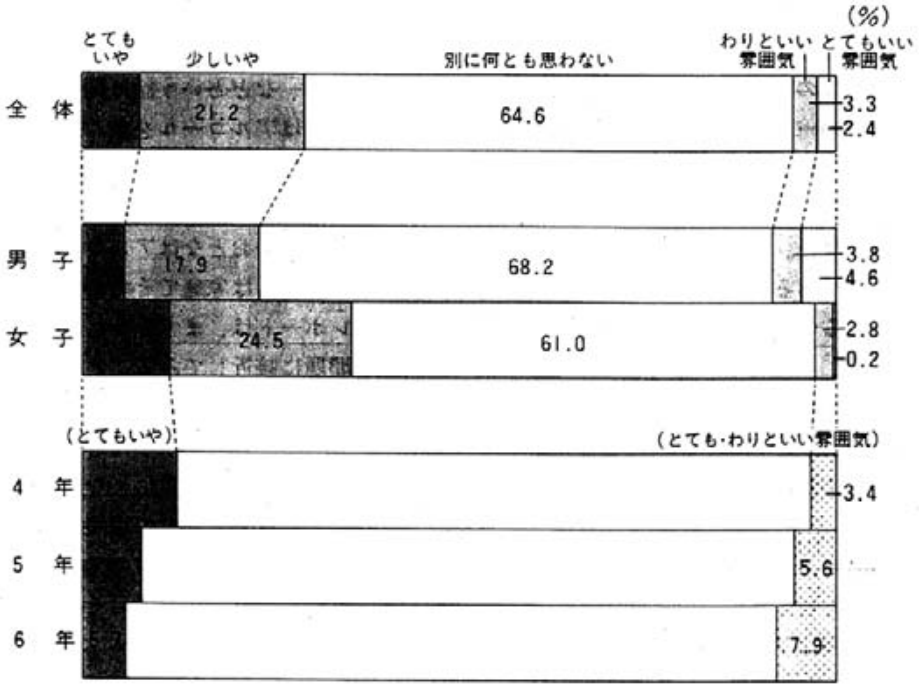


図2　家族が酒を飲むことをどう思うか



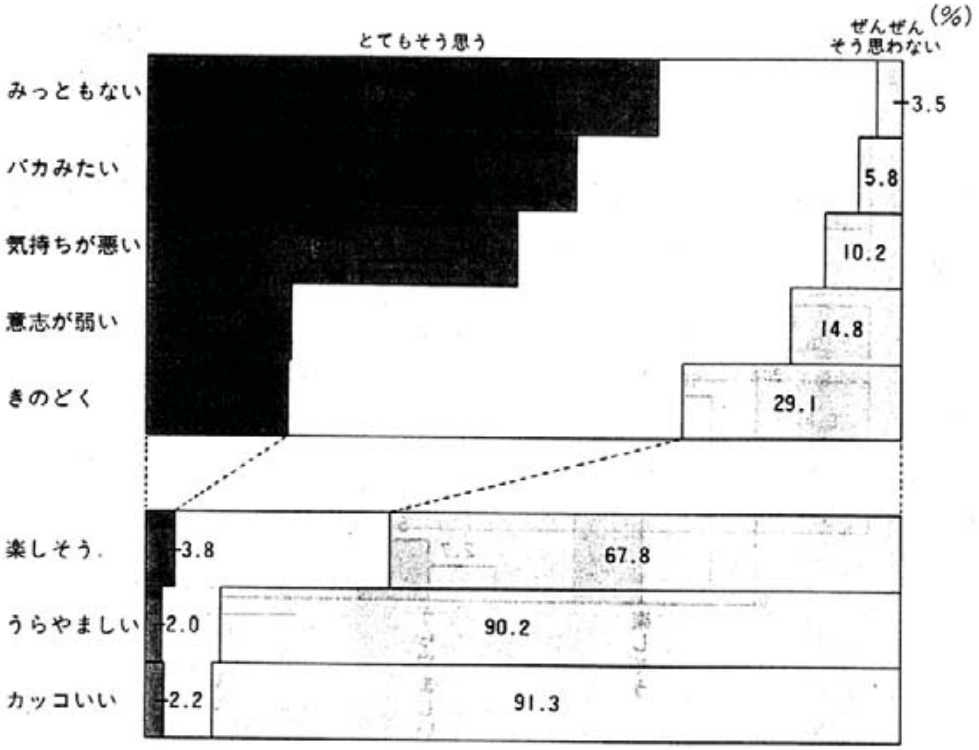
かく子どもの7割は「何とも思わない」か、むしろ「いい雰囲気」と言っている。そしてごくわずかだが、学年と共に「とてもいや」とする者の割合はへり、逆にこれもごくわずかだが、好ましいとする者がふえていく。子どもがおとなになっていく（おとなの感覚に近づいていく）姿をかい間見る思いがする。

酔っぱらいのイメージ

車中で泥酔して寝込んでいる乗客を、見ず知らずの他人の乗客（ほとんどが男性）が終点で起こしている光景にしばしば出会うものである。そんな時、男性同士の連帯感もしくは酒飲み同士の連帯感を感じて、おやまあ、と思ってしまう。女性にはとうてい理解できない風景の一つである。飲酒や酔っぱらいに対する感情は、この例にも見られるように、大きな個人差がありそうだ。次に、子どもたちが酔っぱらいをどんな目をもって眺めているのか、見ていくことにしよう。

図3に示したように、子どもたちが酔っぱらい（駅などで酔っぱらっている男の人を見るとどう思いますか、とたずねた）に注ぐまなざしは至って冷ややかだ。「楽しそう、うらやましい、カッコいい」は皆無に近く、とても「みっともない」68%、とても「バカみたい」57%、とても「気持ちが悪い」49%という数字である。「きのどく」とか「意志が弱い」など、多少とも酔っぱらいに対する同情

図3　酔っぱらいのイメージ



や共感を示す反応は極めて少ない。上記の数字に「少しそう思う」を加えれば、9割かそれ以上が冷ややかなまなざしを投げていることがわかる。この点は、後に出てくるタバコ飲みに対する態度と大きく違っている。

図4、図5はその性別による結果である。

ネガティブな評価の側面では、「気持ちが悪い」を除く4つの項目、「みっともない、バカみたい、意志が弱い、きのどく」とも、意外なことに男子のほうが強く反応している。女子にとっては他人事なのかもしれない。

図4　酔っぱらいのイメージ×性別

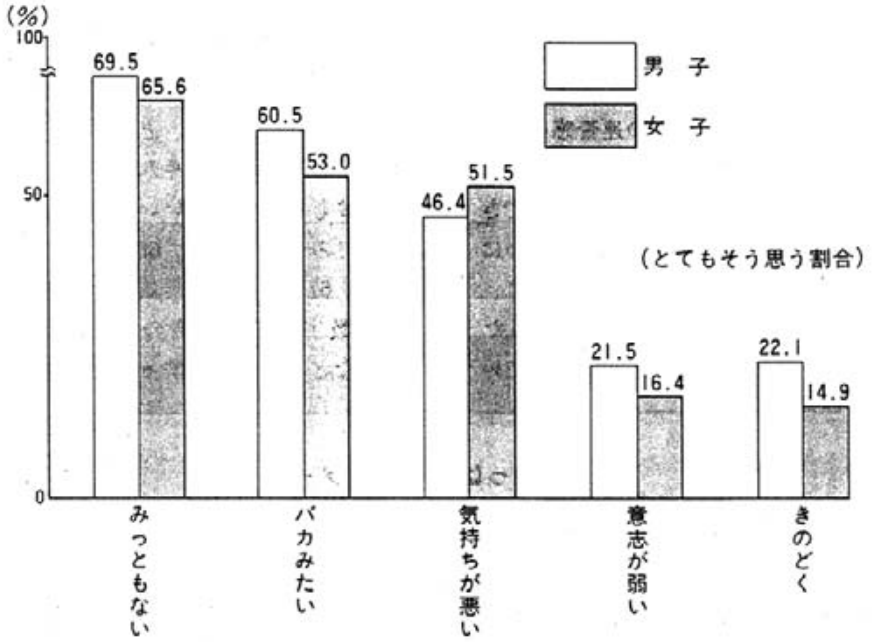
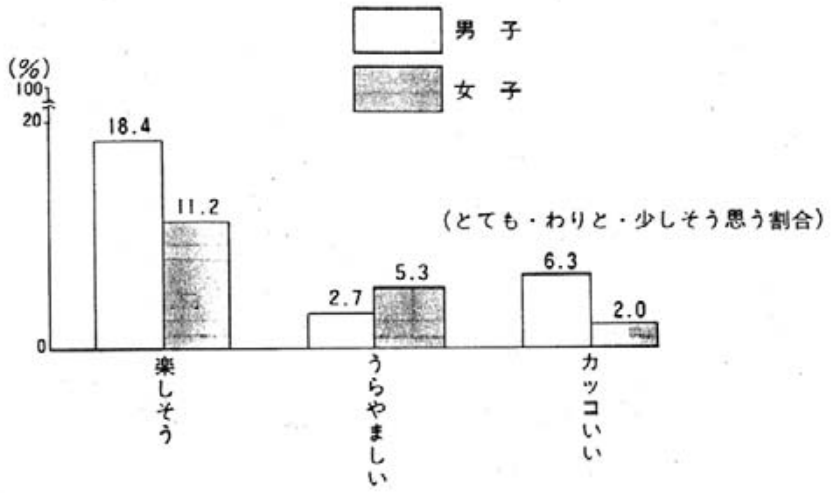


図5　酔っぱらいのイメージ×性別



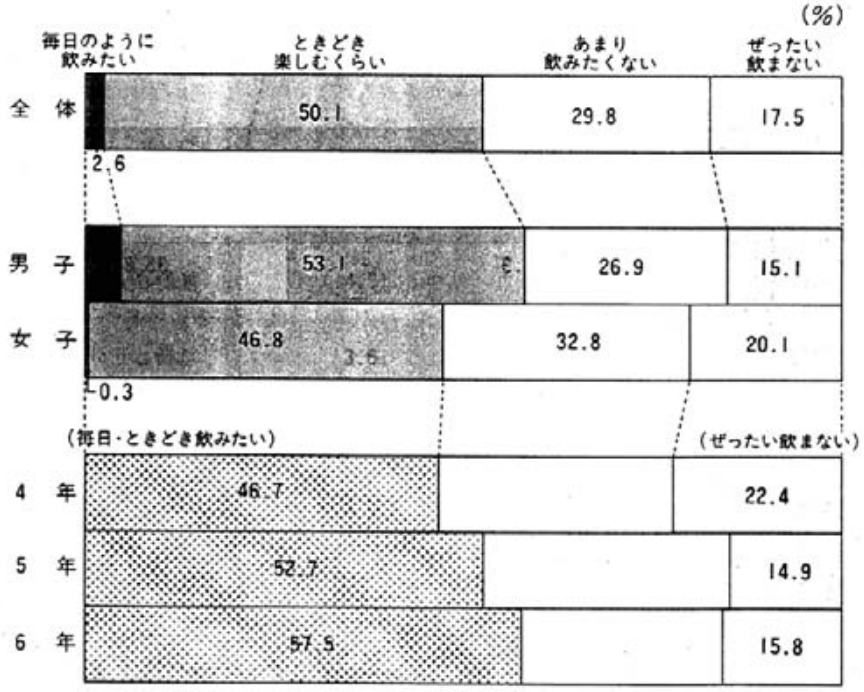
が悪
、バ
、意
る。
。

おとなになったら自分は

子どもの周囲には酒飲みがたくさんいて、しかも子どもたちは、酒飲み（とくに酔っぱらい）を冷たい目で見ていることを見てきた。ならばおとなになった時、自分は酒とのつきあいをどうしようと思っているのだろう。

図6によると、子どもはそれほどアルコールを回避していない。「ぜったい飲まない」はわずか18%。「あまり飲みたくない」を含めても、ネガティブな反応は5割に過ぎない。しかも性差は意外に少なく、またアルコールに対する親近感は学年と共に少しずつふえていき、4年生と比べると、6年生では10%もの増加を示している。この調子でいけば、中学・高校では、そうした親近感が加速度的に増加するのではないだろうか。

図6　子どもは、おとなになったら酒を



子どもが飲んでいいか

では、現在の自分についてはどうか。少しぐらいなら子どもでもアルコールをたしなむことが許されると思っているのだろうか。

図7、図8は、「よその家でのお祝いの会に出されたワインを小学生の子どもは飲んでよいか」という設問の結果である。「酔わなければ何杯飲んでもよい」が7%、「一口ぐらいならよい」61%、「ぜったいいけない」33%で、思ったより「ぜったいだめ」とする者が少ないことがわかる。また図8によれば、「ぜったいだめ」とする子の割合は学年と共に大幅にへっていく。4年で46%、5年31%、

図7　お祝いの会のワインを飲んでよいか

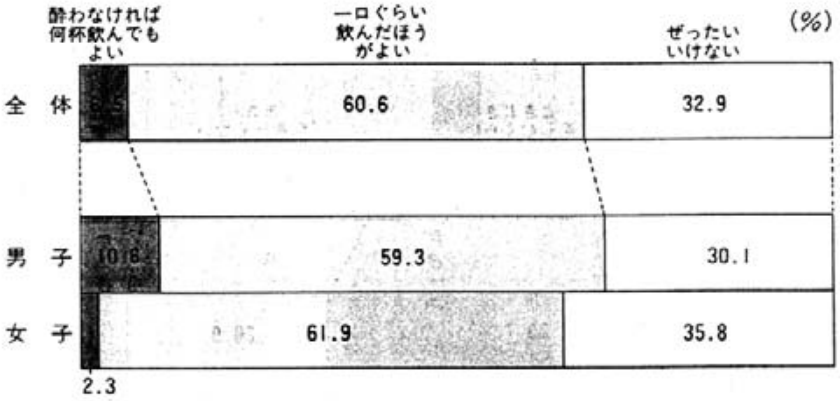
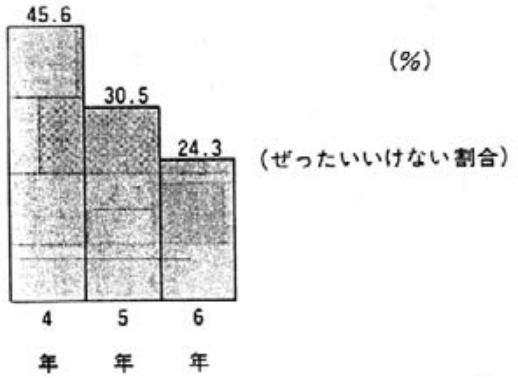


図8　お祝いの会のワインを飲んでよいか×学年



6年になるとたったの24%となってしまう。

また表1は、子どもの属性との関連を見ようとしたものだ。「成績」をとり出したのは、これが一般に子どもの意識や行動のデータ分析に有効なキーの1つであることが多いためだが、表が示すように、成績の最下位グループにはやや他より規範感覚のくずれた者が多いだけで、全体にはあまり相関がみられない。成績以外の他の属性では、ダントツに密接な関連を示すのが、「あなたはきまりを守る子ですか」で、表2が示すように、「ぜんぜん守らない」群では、「何杯飲んでもよい」43%、「一口ぐらいなら」43%、「ぜったいだめ」14%と、他に比べて大きく違った分布が見いだされる。この層の子どもたちについてのフォローアップが必要だろう。

また、アルコールを子どもが飲んではいけないわけをたずねてみたのが図9、図10、図11である。用意された4つの選択肢のうち、「法律で決められているから」は、真意がうまく子どもに伝わらなかったふしが見られる（クロス分析の結果などから）ので、一応除いて考えるとして、ダントツに子どもが反応しているのは、「酒は子どもの体に悪いから」だ。しかし子どもが親の背丈を追いこす年齢、たとえば中2くらいになったら、この理由はどのくらいの説得力を残すだろう。また図10では性差は僅少だが、男子のほうに肯定する者が多いこと、図11からはどの項目にせよ、学年と共に肯定率が下がり、こうした理由づけがしだいに説得力のないものになっていくようすがわかる。

表1　成績×規範感覚(子どもの飲酒)

(%)

規範感覚 ＼ 成績		お祝いの会のワイン		
		何杯飲んでもよい	一口ぐらいなら	ぜったいいけない
	とても得意	14.5	52.2	33.3
	わりと得意	3.6	63.1	33.3
	ふつう	5.4	61.2	33.4
	少し苦手	6.6	49.0	34.4
	とても苦手	11.7	63.5	24.8

表2　きまりを守るか×規範感覚(子どもの飲酒)

(%)

規範感覚 ＼ きまりへの態度		お祝いの会のワイン		
		何杯飲んでもよい	一口ぐらいなら	ぜったいいけない
きまり	とてもよく守る	14.6	39.6	45.8
	わりと守る	1.5	53.7	44.8
	ふつう	4.1	62.5	33.4
	少し守らない	10.7	67.0	22.2
	ぜんぜん守らない	42.9	42.9	14.3

図9　子どもが酒を飲んではいけないわけ

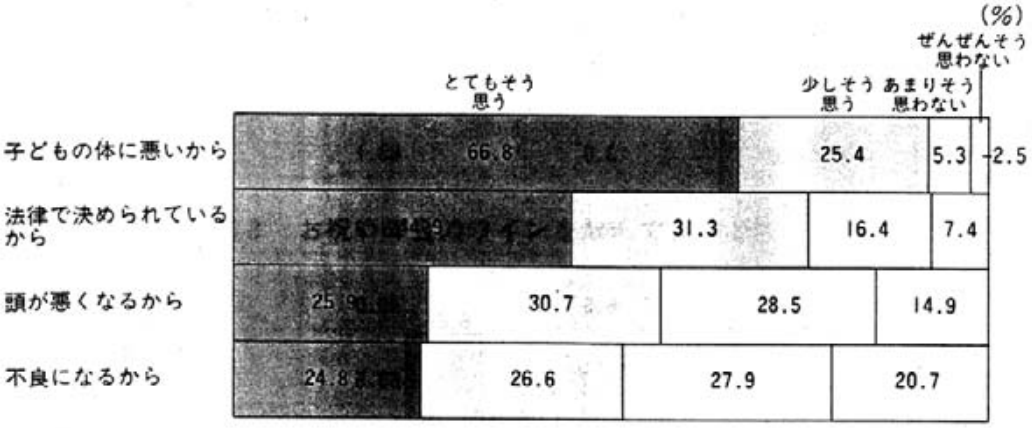


図10　子どもが酒を飲んではいけないわけ×性別

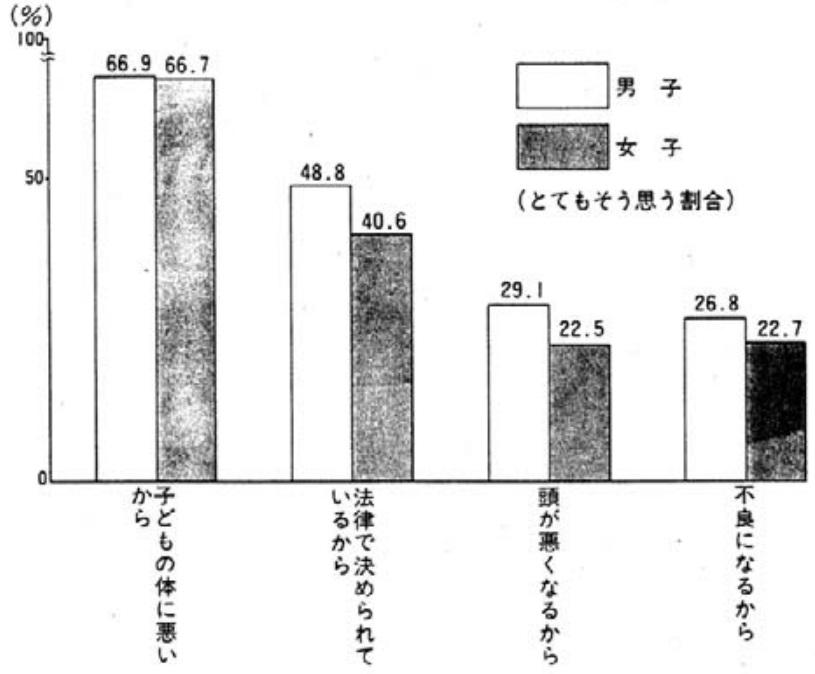
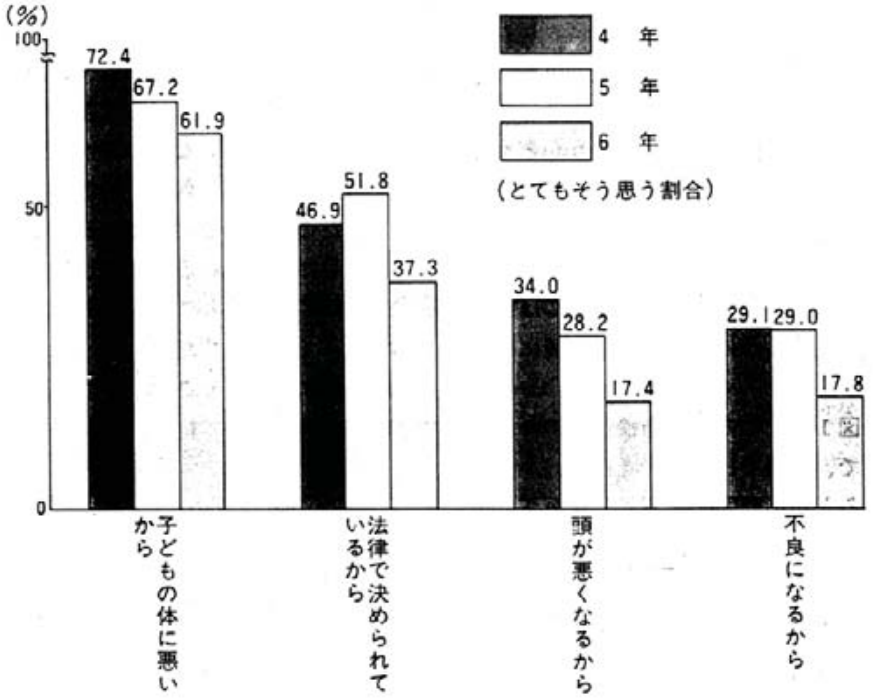


図11　子どもが酒を飲んではいけないわけ×学年



2. 子どもとタバコ

子どもの喫煙環境

前章に引きつづき、子どもとタバコとの関係を見ていくことにしよう。

まず図12は、両親がタバコを吸うかどうかである。今タバコを吸っている父親は59%、母親は17%で、これを先に見た図1の酒を「毎日あるいはときどき飲む」父親86%、母親56%と比べると、子どもはタバコに関しては、アルコールよりはるかにクリーンな環境にいることがわかる。

しかし図1のところでも指摘したのだが、図12の中で、母親で17%もが現在タバコを常用しているという数字には、また驚かざるをえない。母親たちは、何のためにタバコのように有害無益なものを常用するのだろう。母体にとっても、料理人としての役割にとっても、家の清掃係としても、全くいいことではないはずなのに。

さて図13は、父親の禁煙への努力である。現在タバコを吸っている父親のうち、「全くやめようとしていない」者は4割。他の6割は過去や現在に、何とか禁煙しようとして努力したことがある（している）ことが、子どもの目に映っている。そうした意味では、子どもはアルコールの何倍も喫煙にネガティブであっていいはずだが、どうだろうか。この点は後に見ていくことにして、図14は、父親にタバコをやめてほしいかどうかをたずねたものだ。

「お父さんが吸いたいのならしかたがない」と言っている子はわずか4%。程度の差こそあれ、子どもたちは皆、父親のタバコをやめさせたい（少なくとも量を減少させたい）と思っている。この数字をタバコ飲みの父親は肝に銘じるべきだろう。ただし、「ぜったい

やめてほしい」に例をとると、ここでも子どもの声は学年と共に小さくなっていく(図15)。これも、おとなへの距離が縮まっていくようすが表れた数字であろう。

図12　両親とタバコ

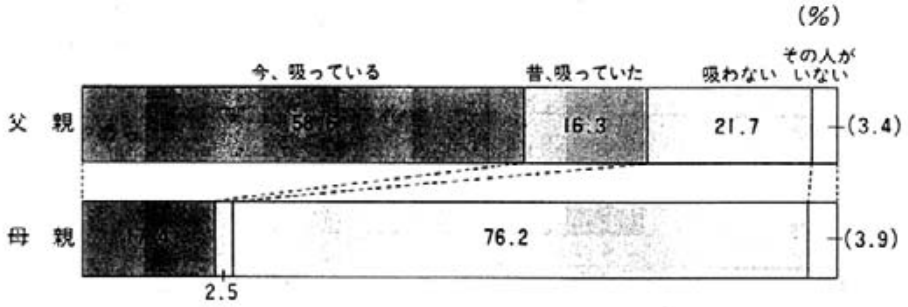


図13　父親の禁煙への努力

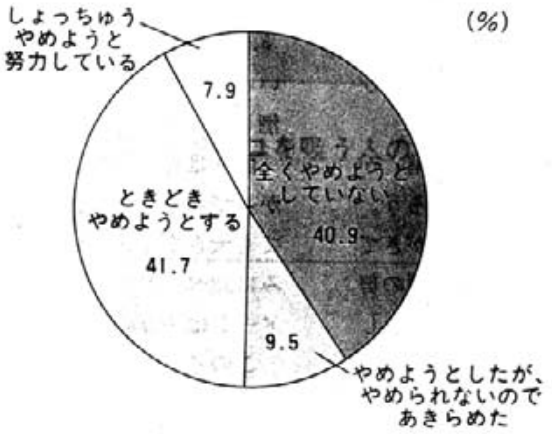


図14　父親にタバコをやめてほしいか

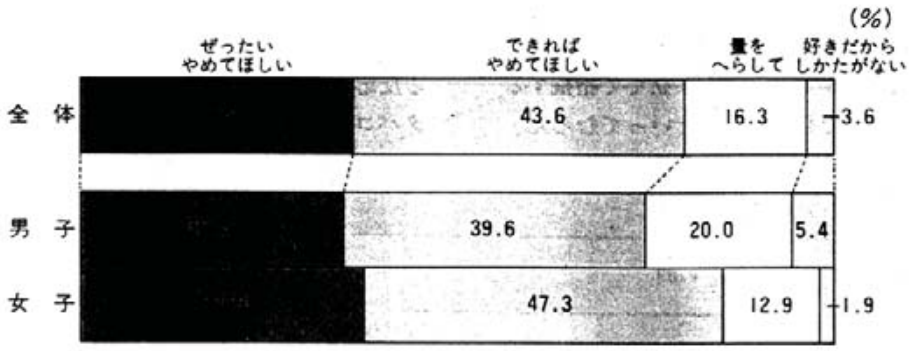
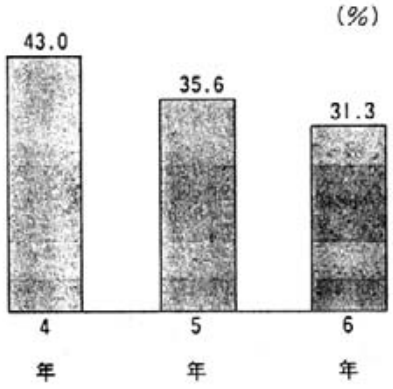


図15　父親のタバコ(ぜったいやめてほしい)×学年



タバコ飲みのイメージ

きて、子どもたちが考えている「おとながタバコを吸う理由」とは何だろう。

図16では、「習慣」と「ストレス解消」が上位にきている。ほぼ的を得た見方だろう。3位に「意志が弱くてやめられない」がきているのは、先に見たように、父親の禁煙の努力を見ているせいか。いずれにせよ、おいしいわけでもカッコいいわけでもなく、体に悪いことを知らないわけでもないのに、ただタバコのトリコになっているおとなの姿が子どもたちの目に映っているようすがわかる。

さてタバコ飲みのイメージだが、図17に示したように、アルコールと同じ形容詞を用いてたずねてみると、どれにも否定的な反応のほうが多くなっている。とり立てて指摘するほど不快な姿でもないし、といってむろん、ほめられる姿でもない。まあそんなもの、といったところだろうか。図18では、タバコと酒のイメージを比べてみた。酒のほうには「酔っぱらっている人」というバイヤスがかかっているものの、両者にはそれを差し引いても大きなイメージの差がありそうだ。酒飲みに比べ、タバコ飲みには、ネガティブなイメージは少ないようである。

このイメージを、父親がタバコを吸うかどうかで見たのが、表3と図19である。非喫煙群と禁煙群ではほとんど差がないが、喫煙群とはかなりの差がある。現在タバコを吸っていない父親の子どもは、タバコ飲みに対して冷たい目を投げている。おもしろいのは、「気持ちが悪い」だけが、他の形容詞に対する反応と数値の大小関係が逆になっており、タバコ飲みの父親の子がいちばん、「気持ちが悪い」と言っているのはなぜだろう。

図16　おとなはタバコをなぜ吸うのか

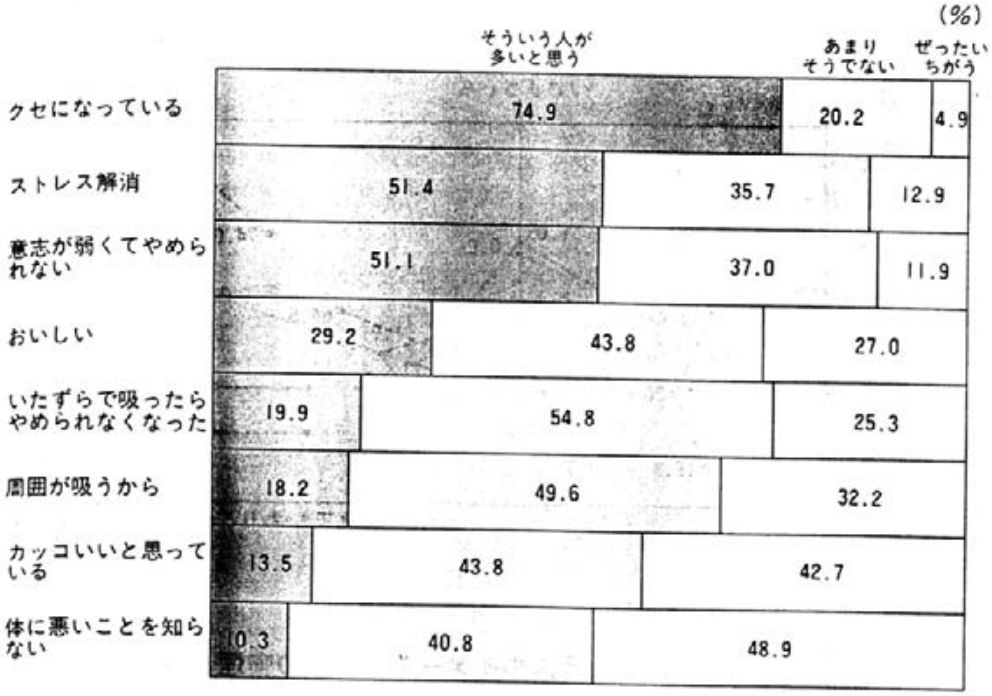


図17　タバコを吸う人のイメージ

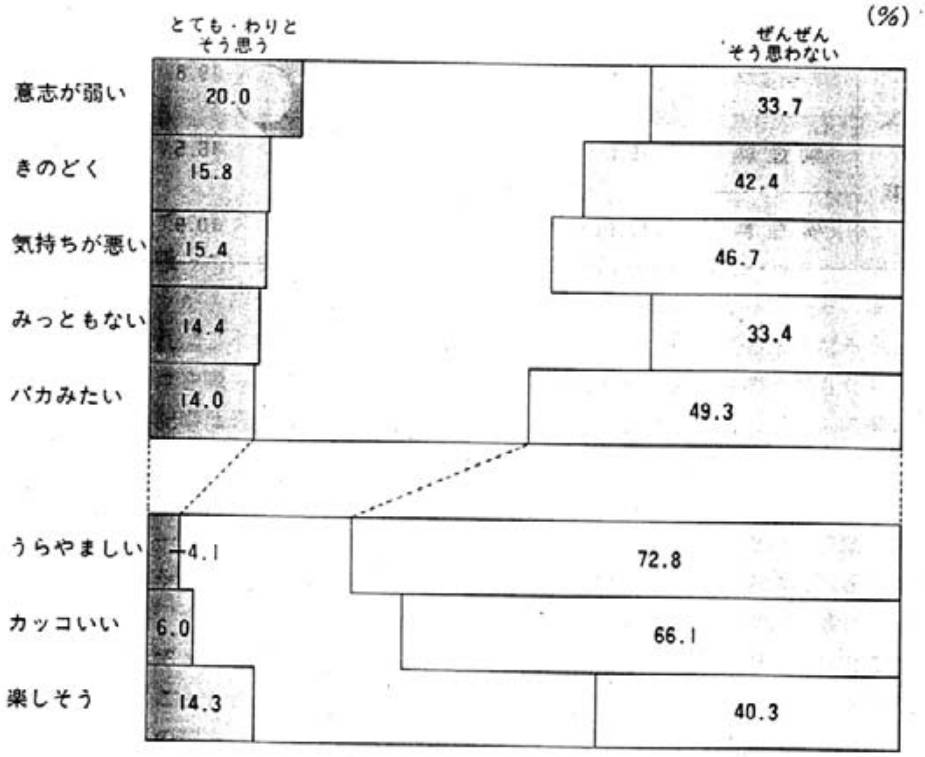


図18　酔っぱらっている人・タバコを吸う人のイメージ

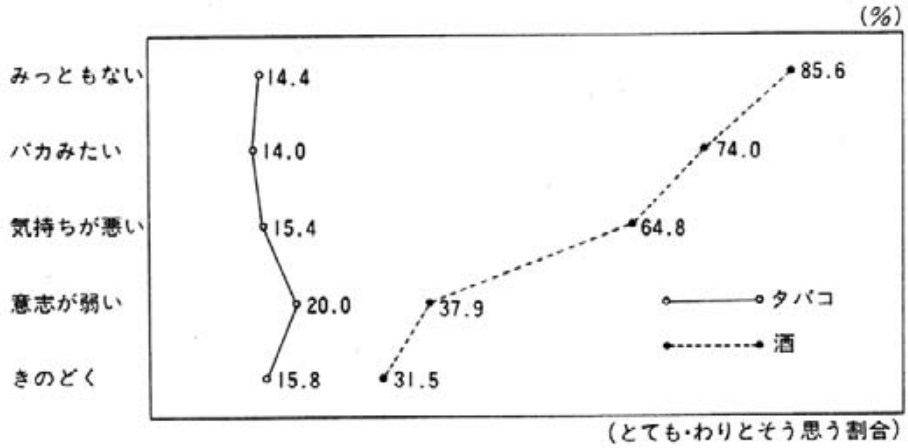
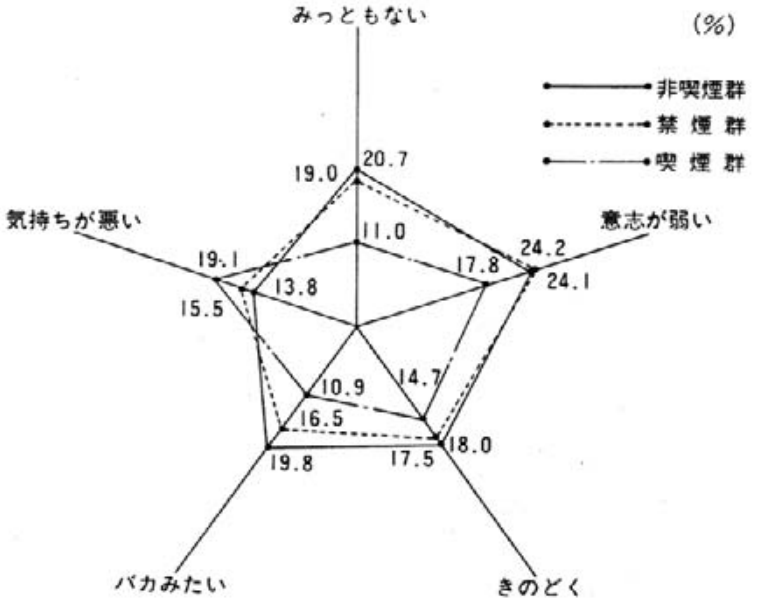


表3　タバコを吸う人のイメージ×父親の喫煙

(%)

父親の喫煙 ＼ 喫煙のイメージ		みっともない	意志が弱い	きのどく	バカみたい	気持ちが悪い
父親	非喫煙群	20.7	24.1	18.0	19.8	13.8
	禁煙群	19.0	24.2	17.5	16.5	15.5
	喫煙群	11.0	17.8	14.7	10.9	19.1

図19　タバコを吸う人のイメージ×父親の喫煙



子どもの喫煙体験

昔から父親の吸っているタバコに興味を持って、陰でこっそり吸ってみた子も、けっこういたのではなかろうか。昭和59年に足立区で行われた調査によれば、小学校卒業までに約3割の男子がタバコを吸った経験を持っていたと、前記の新聞記事は報じている。

しかし「たった一度」のいたずらまでを喫煙体験にカウントするのも、オーバーかもしれない。そこで、「一度だけ」と「何回か」を分けてたずねたのが、図20である。一度も体験のない子が78%。むろん、女子のほうが吸っていない。そして学年を追うにつれて、体験者がふえていくこともわかる。6年生男子では33%が足立区の調査と同じく一度以上の体験を持っている。

これを体験者全体でみると、一度だけが16%、何回かが5%となっている。単なるいたずらなら一度で止めてしまうだろう。となると、何回も吸った5%の子どもたちのことが気にかかる。中学に入ってからの喫煙常習者は、ここから育つのかもしれない。

なお表4は、これを学年・性別でくわしく見たものだ。「一度もない」子は、4年から5年にかけて男女とも急激にへる。4年から5年にかけてが「いたずら」盛りということになる。しかし、「数回」吸ったことのある子は、学年を追ってジワジワとふえていくこともわかる。男子では2.6%、7.4%、11.6%、

女子は1.4%、2.9%、4.1%となり、この数字の増加は不気味ですらある。中学以降の喫煙防止対策のためには、この層の属性分析が必要だろう。

この点をさらに見ていこう。まず表5は、父親の喫煙との関係だが、父親がタバコを吸わない場合、子どものタバコのいたずら率(1回)は大きくへっている。また「数回」の体

図20　子どもの喫煙体験

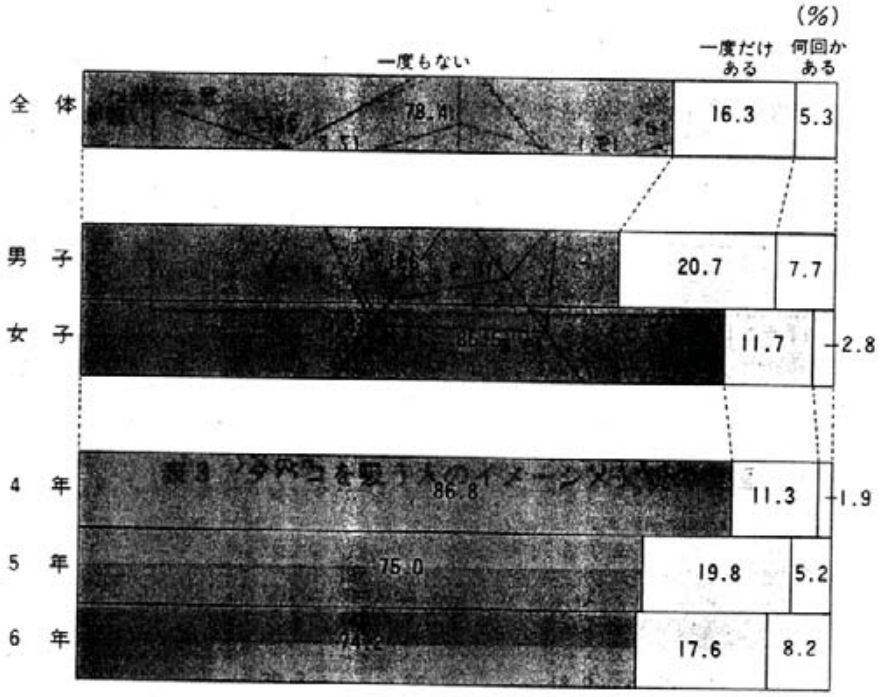


表4　子どもの喫煙体験×学年・性別

(%)

学年・性別 ＼ 喫煙体験		一度もない	一度だけある	何回かある
4年	男子	81.9	15.5	2.6
	女子	91.0	7.7	1.4
5年	男子	67.4	25.1	7.4
	女子	82.9	14.1	2.9
6年	男子	67.5	20.9	11.6
	女子	82.3	13.6	4.1

験者も、他の2群と比べて少ない。平凡な結論だが、まず父親の喫煙率をへらし、子どもがタバコに親和性を示さないようにすることが、なにより大切だろう。

次に表6は、何回も喫煙体験を持つ子の属性である。子どもの自己評価の7つの側面との関連では、ダントツに「きまりを守るかどうか」、つまり規範感覚の有無が、喫煙体験（数回に及ぶ）と密接な関連を持っていることがわかる。「きまりをとてもよく守る」グループには体験者がゼロだが、数字は1.5%、3.9%、10.5%とふえていき、「きまりをぜんぜん守らない」グループでは、実に25%の出現率をみている。他の属性との関連はこれほどではないが、「勉強がとても苦手」で「ぜんぜんがんばらない」層は、やはり数字が大きいこともわかる。

表5　タバコのいたずら経験

(%)

父親の喫煙 ＼ いたずら経験	子どもの	一度もない	一度だけある	何回かある
父親	非喫煙群	85.6	11.2	3.2
	禁煙群	78.7	16.2	5.2
	喫煙群	75.9	17.9	6.1

表6　何度も喫煙体験を持つ子の属性

(%)

尺度 ＼ 項目	スポーツ*	勉強	友人の数*	テレビをみる*	マンガをみる*	きまりを守る	がんばる
得意(多い)	7.6	8.8	6.1	8.4	7.2	—	4.3
	7.3	4.0	5.1	3.2	3.2	1.5	2.4
	3.5	4.1	4.3	4.3	3.2	3.9	5.8
	3.5	4.9	7.0	1.7	5.4	10.5	7.1
苦手(少ない)		10.9				25.0	10.3

＊「とても・少し」苦手をまとめてある

なぜ子どもが吸っては悪いのか

アルコールと同じく、タバコを子どもが吸ってはいけないわけをたずねてみた。**図21**、**図22**が示すように、理由づけはアルコールの場合と大差はないし、性差も同様である。ただし**図23**に示すように、「頭が悪くなる」を除くと、率が高まっている。なぜかタバコよりアルコールのほうが、「頭が悪くなる」と思う子どもの数が多いのはおもしろい。

なお**表7**、**表8**によると、タバコの害については、「勉強のできる子」「きまりを守る子」のほうが、そうでない子よりも恐れているようすもみられる。それだけ自分を大切に考えているのだろうか。それとも、優等生はすべて、オーソリティーの言うことに従順なのだろうか。

図21　子どもがタバコを吸ってはいけないわけ

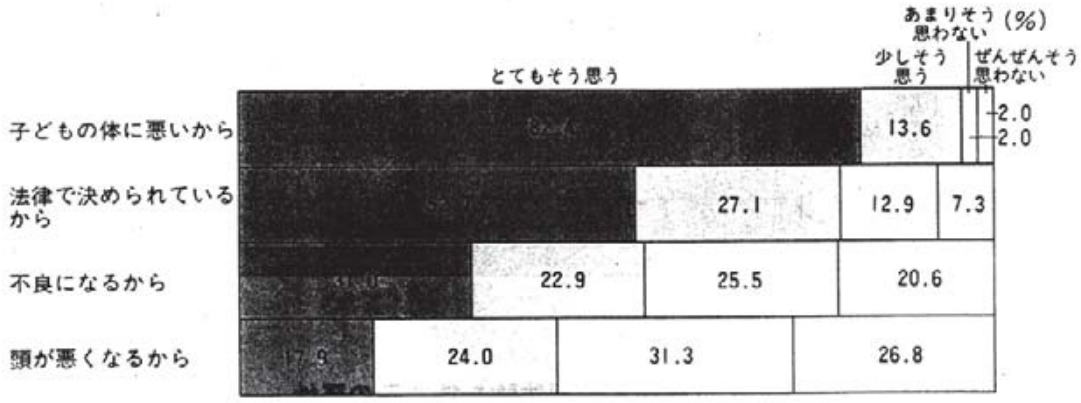


図22　子どもがタバコを吸ってはいけないわけ×性別

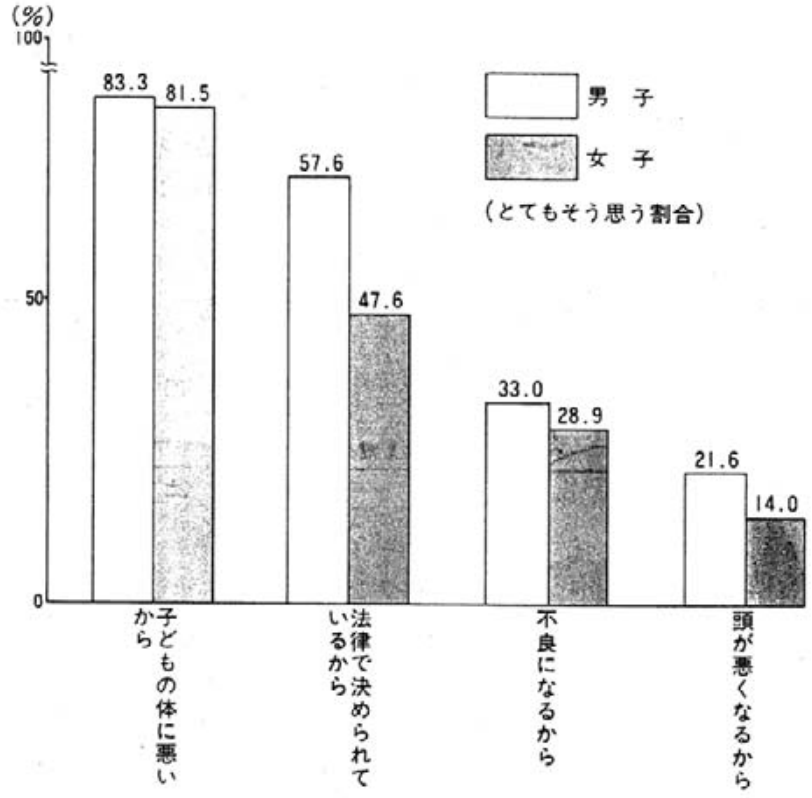


図23　子どもの飲酒と喫煙が悪い理由

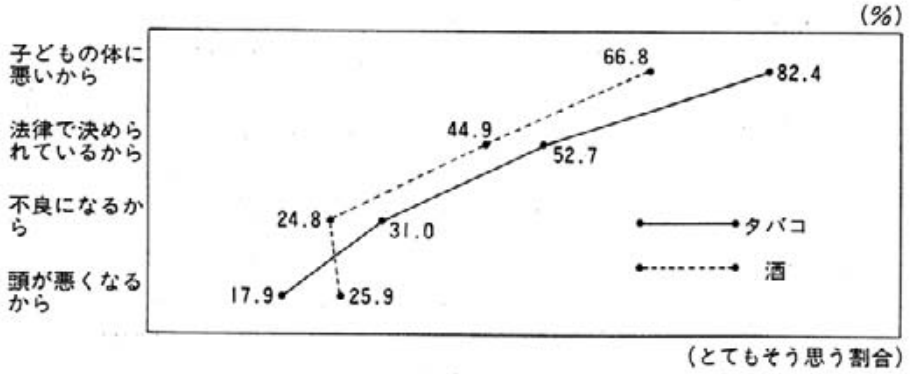


表7　子どもが喫煙してはいけない理由×成績

(%)

成績 ＼ 喫煙してはいけない理由		体に悪いから	頭が悪くなるから	不良になるから
勉強	とても得意	87.9	23.4	32.8
	わりと得意	82.2	17.6	32.1
	ふつう	83.2	18.3	30.9
	少し苦手	83.6	15.5	28.5
	とても苦手	76.6	17.9	34.7

（とてもそう思う割合）

表8　子どもが喫煙してはいけない理由×きまりを守るか

(%)

規範感覚 ＼ 喫煙してはいけない理由		体に悪いから	頭が悪くなるから	不良になるから
きまり	とても守る	91.7	38.3	53.2
	かなり守る	89.2	21.8	39.2
	ふつう	81.9	15.8	28.7
	あまり守らない	81.3	17.0	30.0
	ぜんぜん守らない	52.8	14.7	17.0

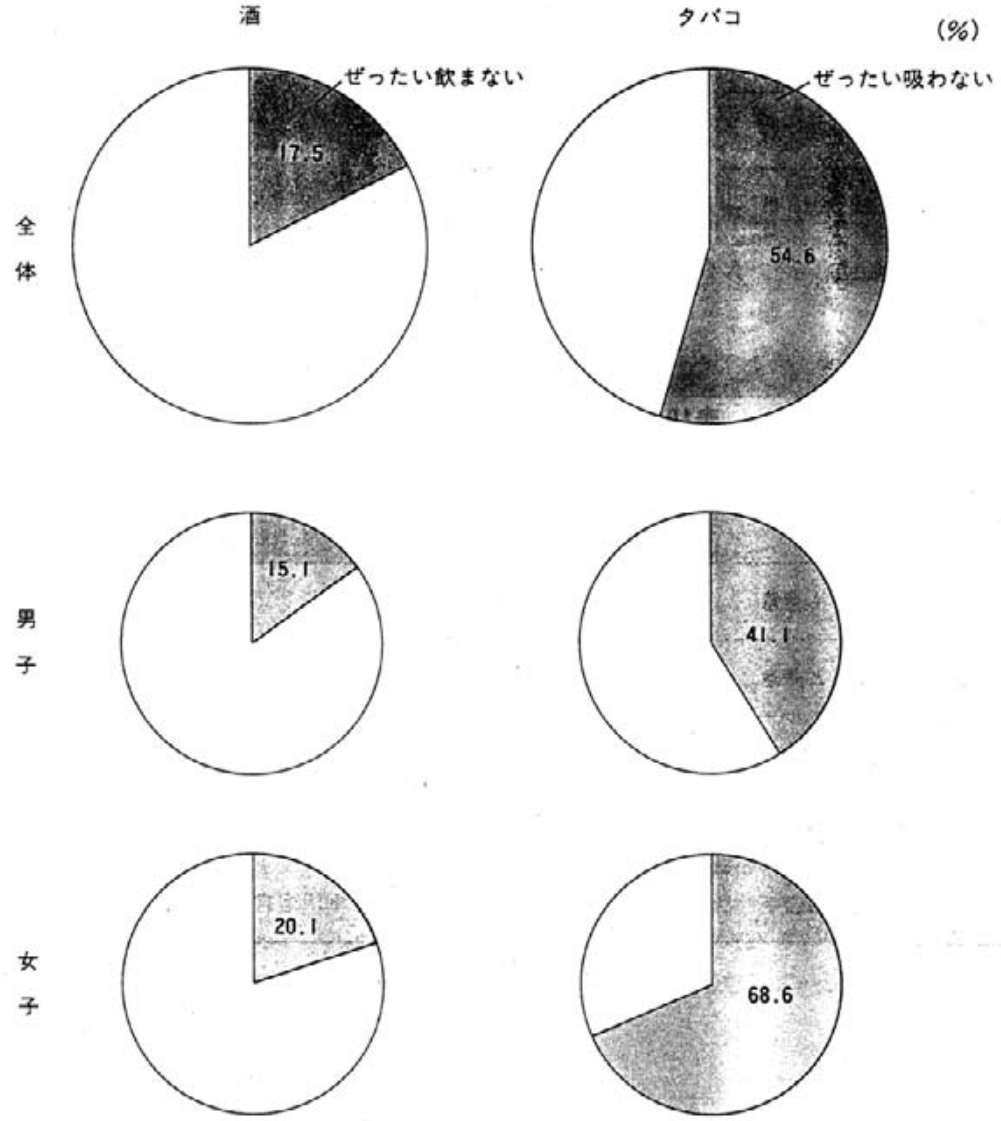
（とてもそう思う割合）

おとなになったらどうするか

では子どもたちは、おとなになったら喫煙をどうするつもりでいるのだろう。

図24に示したように、「ぜったい吸わない」と言っているのは55%。性別では女子が69%、男子が41%。つまり男子の6割は、将来タバコを吸う自分をイメージしている。図の左側に掲げたアルコールに比べると、「吸わない」と答えている者の数ははるかに多いものの、それでも、「タバコは吸わない」とする子の数がもっとずっと多くていいのではなかろうか。

図24　おとなになったら酒とタバコを



また表9によれば、父親がタバコを吸う群には「将来タバコを吸う自分」をイメージしている者が他のグループの2倍にもなっていて、やはり環境の大切さが示されている。

また表10は成績との関連だ。あまり関連は見られないが、それでも「勉強がとても苦手」なグループは、やはり他のグループより「将来吸っている自分」を思い描いている者たちが、はるかに多くなっていることがわかる。

表9　自分は将来タバコを吸うか×父親の喫煙

(%)

父親の喫煙 ＼ 将来タバコを		子どもは、[illegible]		
		ぜったい吸わない	吸わないつもり	吸う
父親	非喫煙群	69.1	23.3	7.1
	禁煙群	57.0	34.1	8.7
	喫煙群	49.6	33.7	16.7

表10　成績×将来タバコを吸うか

(%)

成績 ＼ 将来タバコを		吸う	吸わないつもり	ぜったい吸わない
勉強	とても得意	15.2	36.3	48.5
	わりと得意	10.1	31.3	58.6
	ふつう	11.6	28.8	59.6
	少し苦手	14.1	36.9	49.0
	とても苦手	25.2	33.3	41.5

手」
「将
たち
る。

3. 車とバイク

子どもたちの中のアルコールやタバコとの親和性を見るのが本レポートの目的だったが、おとなとの距離という観点で、もう一つ「車とバイク」への関心をもとりあげたので、最後につけ加えよう。

車とバイクの所有率

まず図25は、子どもの家庭の自家用車とバイクの所有率である。バイクは3割と少ないが、車社会の名の通り、自家用車を持っている家庭は73%もあり、アルコールやタバコより、車ははるかに子どもの身近にあることがわかる。

また図26、図27は、家族でバイクと車の運転をする者の有無である。バイクを運転する者は少ないが、車については父親の8割、母親の4割が運転をしている。

図25　車とバイクの所有率

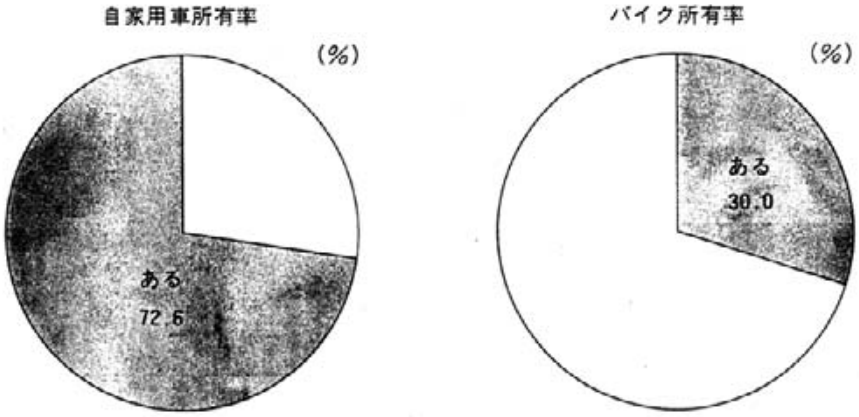


図26　家でバイクを運転する人

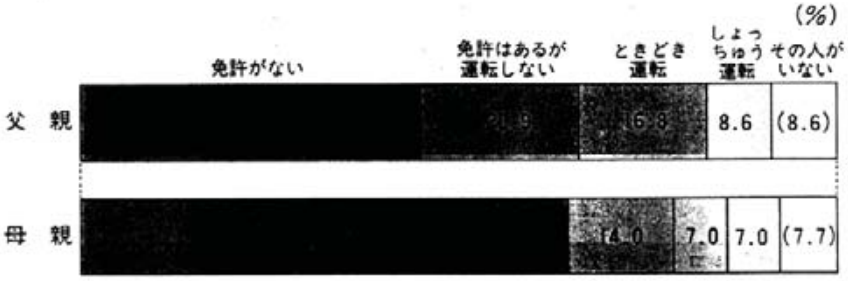
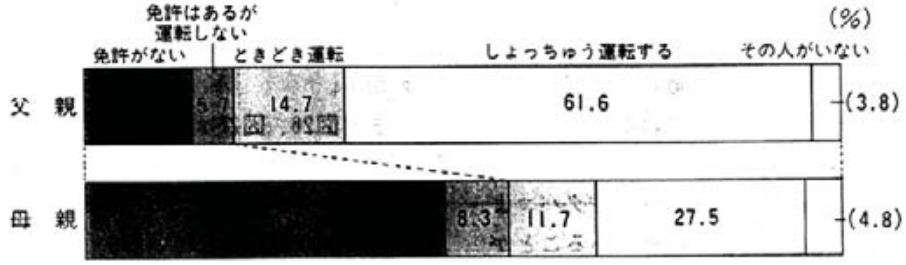


図27　家で車を運転する人



さて、るたつとの3になは性別%もまる。層強

免許への関心

さて子どもはこうした車社会の中に成長して、バイクや車にどのくらい関心を持っているだろう。まず**図28**は、「バイクの免許をいつとりたいか」である。現在の時点で、男子の3割、女子の2割が、「免許がとれる年齢になったらすぐ」と答えており、またその割合は、学年と共に増加していく。これを学年・性別でみた**表11**によると、男子は6年生で36%もが、バイクへの関心を示している。

また**図29**は同じく、車の免許についてである。バイクの免許より車の免許への関心は一層強く、男子の6割近く、女子の4割が、「免許がとれる年齢になったらすぐとりたい」と答えている。さらに表11によると、バイクへの関心が4、5、6年と少しずつふえていくのに対して、車は早い段階からかなりの子が強い関心を示してしまうため、数字の伸びはバイクほどではないことがわかる。それでも6年男子の58%、女子の43%が、「できるだけ早く」と言っており、こうした強い関心が、車やバイクの無免許運転につながらないための指導は、今後、中・高校の生徒指導における大きな課題となるであろう。

図28　子どもは将来バイクの免許を

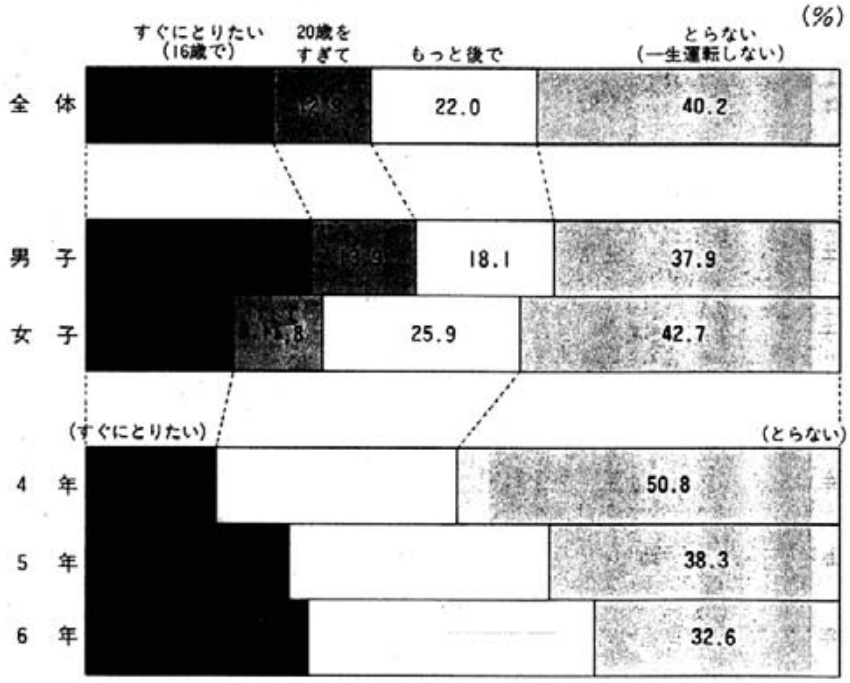


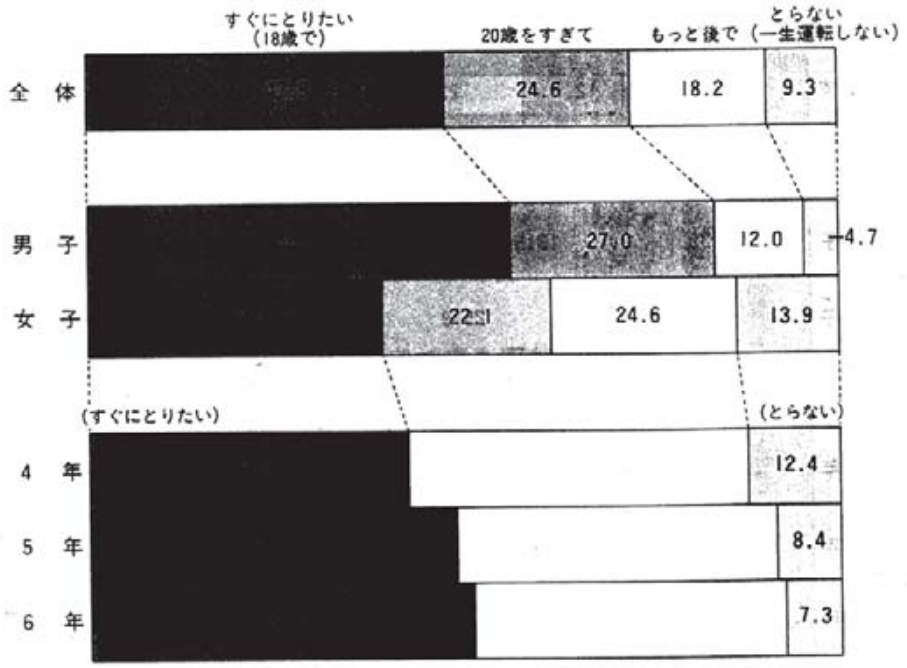
表11　できるだけ早く免許をとりたい×学年・性別

(%)

学年・性別 ＼ 項目		バイクの免許	車の免許
4　年	男　子	20.1	51.0
	女　子	14.9	35.6
5　年	男　子	32.4	58.3
	女　子	21.5	39.5
6　年	男　子	35.7	58.4
	女　子	22.6	43.0

図29　子どもは将来車の免許を

(%)



♥

まとめに代えて

子どもたちに規範感覚の育成を

これまで、子どもたちの中にあるアルコール、タバコ、車（バイク）との親和性を見てきたわけだが、データの随所に、片やおとなのすることへの「あこがれ」、片や「規範感覚の崩れ」を思わせる数字が見いだされた。子どもたちの中にひそむこうした態度や態度上の問題点に、われわれは今後どう対応していったらよいのだろう。

子どもたちの示す行動特性との関わりでデータ分析をした際におもしろかったのは、ふつうはこの種のデータ分析の際に、いちばん重要なキーとして働く「成績」が、今回はそれほどの役割を果たさなかったことだろう。そのかわり、「あなたは、きまりを守る子ですか」という、いわば「規範感覚の有無」が成績にかわって意味を持っていたようすが見受けられた。

そこで、このような規範感覚の有無にしぼって、本調査の主要な結果をまとめてみたのが次ページの**表12**である。

表が示すように、車、アルコール、タバコへの関心や親和性のいずれもが、規範感覚と密接に結びついていることがわかる。日常生活において、「きまりを守らない子」という自己評価をする子は、バイクや車の免許をできるだけ早くとりたがっており、これまでにタバコを吸った経験もいちばん多く、子どもでも、酔わなければワインを何杯飲んでもよいと思っており、おとなになったらタバコも吸うし、酒も毎日飲みたいと答える子が多くなっている。

その次には、逆に「きまりをよく守る」グループがやや特異な反応をしているが、これは成績のよい（知的に進んだ）グループと重なるので、青年期特有の権威への反抗とみなしたほうがよいだろう。「守らない」グループの反応とは別の解釈をすべきだろう。

子どもに、彼らを納得させる形で「子どもらしくしているように」、つまり「おとなのしてよいことと子どものしてよいことは別だ」と言って聞かせることは、むずかしい。日本社会は最近とみにおとなと子どものケジメのくずれた社会になりつつあるようにも思われる。しかし、子どもたちのすべてを、体も心

も健やかに育てるために、しばしば何らかの「ケジメ」を必要とすることがある。そして(たとえ不服でも)、このケジメを守れるかどうかは、最後のデータで見てきたように、子どもの中に健康な規範感覚が根づいているかどうかにかかってくるように思われる。

おとなになりたい、おとなにあこがれる、なんでもやってみたい……子どもたちのそうした気持ちは大切にしながらも、価値の多様化する社会の中で育つ子どもたちに、どうすれば健康な「規範感覚」を育てることができるか、それがわれわれおとなに与えられた今後の課題だろう。

表12　自己評価（きまりを守る）との関連で

(%)

自己評価 ＼ 項目	バイクの免許を16歳で	車の免許を18歳でとり	おとなになったら毎日	ぶどう酒は一日一杯くらい	タバコのいっぱい吸う	おとなになったら喫煙する
常に		28.6	55.1	10.2	14.6	91.5	12.5
きまりを		18.1	45.5	1.0	1.5	87.1	8.6
ときどき		22.6	45.5	1.8	4.1	79.9	11.3
あまりこだわらない		32.1	53.5	2.9	10.7	69.4	20.8
本当にせんせん守らない		51.4	64.9	13.5	42.9	52.8	33.3

※おことわり：本文中に使用した写真は本文・テーマとはいっさい関係ありません。